

身体が熱い。ある一点を中心に熱は先程よりも更に上がって俺の思考を乱した。

あの女……俺と結婚したいが為に媚薬まで盛って迫ってきた女に明確な殺意を抱く。

友好国の王女だからとこっちはそれ相応の態度で接していたのに、そうしたら何を血迷ったのか一国の王相手に薬を盛るというとんでもない暴挙に出やがった。

当の王女は今現在城の一室に幽閉していて、その付き人や関係者は全員地下牢に入れてある。

一方媚薬を盛られた俺の身体は、多少普段より熱が高いと感じたが当初の変化はそれだけだった。

念の為すぐに医師を呼んで使われた薬を確認させたが、副作用もなく安全性の高いものだと言われた。

それを聞いて心配する家臣達を他所に事情聴取などは翌日に行うと告げ、俺は普段通り広い自室の広いベッドで一人眠りについたのだ。――それから一時間も経たないうちに身体の熱はどんどん上がり、気付けば一人ではどうにもならない程にチンポはバッキバキになっていた――

（クソ……あの藪医者め……遅効性のものだとは聞いてないぞ……しかもこの効果……本当に安全なのか？）

息を荒げながらベッドの上で己のバキバキに反り返ったチンポを見下ろす。

常よりデカさには自信がある方だが“コレ”はそんな

自分でも引く程にデカくなっていた。

（女を呼ばせ……いや駄目だ、今女を抱いたら絶対に孕ませる）

普段は行為の際は必ず避妊しているのだが今日はそんな準備もしていない。尚且つこの状態で女を前にしたら避妊など考える余裕もなくなるという自覚もあった。

まだ幼い甥に時が来たら王位を譲ると決めている為、下手な問題を増やさないよう自分の子を作る訳にはいかなかった。

（クソ……ッ、……穴……取り敢えず何でもいいから穴にぶち込みてえ……）

ケツ孔にでもぶち込むか？いやうっかり膣の方にぶち込んでしまいそうだ——思考が乱れ取り留めなくごちゃごちゃ考える。

とにかく何でもいいからこのチンポを肉孔に収めたい。それで思いのままに孔を突いて存分に精子をぶち撒けたい。熱に冒された頭が欲望を正直に叫び、身体は無意識に右手でチンポを扱いた。

バキバキに張り詰めたチンポを扱きながら、このチンポをぶち込める誰かが目の前に現れてくれないだろうかと願った。

「……………へ？　ここ、どこ……？？？」

学校の帰り道、信号無視のトラックが突っ込んできて轢かれる！と咄嗟に目を瞑った。

けど覚悟した衝撃はなく恐る恐る目を開けたら、そこにはつい数秒前までいた景色とは全く違うものが広がっていた。

歩き慣れた家までの道が、豪奢でアンティークな室内に変わっている。

広々とした部屋を見渡して、飾られた絵画や装飾品の数々に一瞬どこかの美術館にでも迷い込んだのかと思った。

けど足元のふかふかした感触にその考えは消える。

（あっ、やべっ、ベッドに靴で上がってるじゃん）

頭は混乱しつつもーいや、混乱してるからだろうか、土足でベッドに上がってる事実に関心し慌てて靴を脱いだ。

高級そうな広いベッダーー自分の部屋のベッドの五、六倍の大きさはありそうなベッドを、汚してないか確認しようとした。

「フッ……ハハ……ツ」

その時不意に、後ろから低い笑い声が聞こえビックリして振り返る。

「ッッ！！？？」

振り返った先には上から下まで何も着ていない真っ裸

の男が、ベッドの上で胡座をかいていた。

「へっ、へんた……………ツツ！！？」

変態と叫ぼうとして、その前に突然ベッドに押し倒される。

男の動きはいつの間に押し倒されていたのか分からないくらい素早く、ベッドに寝かされたまま思わず呆気にとられてしまった。そしてそこで俺は下から男を見上げてその顔を初めて認識する。

男は光り輝く見事な金髪と美しく澄んだ青い瞳に彩られた、とびつきりに素晴らしいパーフェクトなイケメンだった。

真っ裸のインパクトが強すぎて顔に目が行かなかった——とそこでふと、もしかしたらこのイケメンはこの部屋の主人なのではないかと唐突に気付いた。

西洋人っぽい煌びやかな顔立ちと西洋風のレトロで豪華な部屋は寧ろそうとしか思えなかった。だとしたら、自分の部屋で裸でいようが当然その人の自由だし、そして俺はただの不法侵入者という事になる。

さああっと血の気が引いた。

「あ……あの……」

「考えるのは終わったか？」

低くて迫力のある声にビクッと肩が震えた。自然と頭を下げたくするような、畏れ多いとすら感じさせる声——その声が続けて言ってきた。

「じゃあもういいよな？ ……もう、我慢しなくていいんだよな？」

「な、なに言って……っヅ ズ ズ ズ ズ ズ ヅ ヅ ヅ ！ ？ ？ ？」

意味のわからない言葉に困惑していると突然、男性が俺の口をキスでピッタリ塞いできた。

続けて舌がにゆるりと侵入してきて俺の口の中を搔き回す。初めてのキスを初対面の金髪イケメンに奪われ驚いてたところに舌まで入れられ混乱は極地に達した。

「ズ ズ ……ツ、ふっ、ふう ゝ ……ツツ、んぐゝ ……っ、ンンン ……ツツ、 ツ…♡ ツ…♡ ツツ ……♡ ふっ、ズ ズ ゝ ゝ ゝ ……っ♡♡」

混乱している俺に構わず男性の舌は俺の口の中で好きに暴れた。中を遠慮なく搔き混ぜ、俺の舌とも強引に絡ませ、クチュ…♡クチュ…♡とかニチュ…♡ニチュ…♡とかそういういやらしい音が耳にたっぷり響いてくる。

「フ ゝ …♡ フ ゝ …♡ ん ん ……っ♡♡ ふっ♡ ツ ……♡ ズ ズ ズ ……ツツ♡♡ ツ ……んゝふうううゝ ゝ ……っ♡♡♡♡」

ジュルジュル舌を吸われ、かぷかぷ甘噛みされ、またにちゅにちゅ舌を絡まされる。その内口の中に俺とこの人の唾液が溜まってきて、仕方なくゴクゴクと……名前も知らないイケメンの唾液を飲ませられた。

「ああ美味い……キスをこんな美味いと感じたのは初めてだ」

「はあ`……♡ はあ`……♡ はあ`……♡ はあ`……♡  
はひゅう`う……♡♡」

突然俺のファーストキスを奪い、濃厚なキスで呼吸困難にさせたイケメンは、悪びれもせず俺の目を真っ直ぐに見つめそう言ってきた。

「……そうだよな、男なら妊娠の心配なんかいらな  
いよな……、ハハ……何でそんな事に気付かなかったんだ  
か……」

そしてまた訳の分からない事を口にする。

「まあいい、こうして都合よく目の前に現れてくれたん  
だ。……俺の前に現れたって事は、俺の好きにしてい  
って事だよなあ？」

金髪碧眼で完全外国人な顔立ちの男性は、綺麗に日本語を喋っているようなのに言っている内容はさっぱり理解できなかった。

完璧に整ったその顔は熱に浮かされ、俺を見つめる美しい青い瞳も熱に潤んでいるように見える。

ハア、ハア、と息を荒げている男性に嫌な予感がするけど両手を押さえつけられ逃げる事ができない。力を入れてるようにも見えないのに俺の手はピクリとも動かなかった。

「ン`ン`ン`……ツツ♡♡」

またキスされる。けど今度はそれだけじゃなかった。

「ン`ン`ッ! ?♡♡ ツ`♡ ツ`♡ ん`う`……っ♡♡

ふッ、ふッ、ツッ……♡♡ んゝ〜〜〜〜〜ツッ♡♡♡」  
乳首を大きな手でぐにぐに捏ねくり回される。そんな事されるのは初めてで戸惑うけど、捏ねられてる突起からムズムズした感覚が生まれた。

男性は左手だけで俺の両手を押さえつけ、濃厚なキスをしながら右手でいやらしく乳首を弄った。

片手だけでも俺の動きは完全に封じられ、同じ男でもレベルの違う相手の圧倒的な力の強さに震える。

(な、なんで……こんな事……ツッ♡♡)

どうして自分がこんな目に遭っているのか全くわからなかった。

「ン ズ ……ツッ！？♡♡」

シャツのボタンが外される。両手は相変わらず押さえつけられそれを止める事はできなかった。

「ズ フ …… ツ♡♡ ツ、 フウ ウゝ …… ツ♡♡  
フウ♡ フウ♡ ツツ ……♡♡ ズ ズ ツ♡♡ フ  
ンウウウウ……ツッ♡♡♡」

平らな胸を女の人の胸のように揉んで、撫で回して、そしてムニユリ♡♡と乳首を摘む。

乳首は目一杯尖ってそれを男性は好きにもてあそんだ。  
乳首なんて、今までオナニーで一回くらいは弄った事あったけど全然気持ちよくなって、なのにこの人に弄られてると甘く痺れるような快感に苦しめられる。

「はっ、はひゅ……っ♡♡ はっ♡ っ……、あゝ♡♡  
や、やだ……っ♡♡ やゝ ……っ、ひん ん ん

ん……っっ♡♡♡」

ジュルジュルジュルジュルジュル♡♡♡

長い時間俺の口を塞いでいた男性の口は、次はそれまで弄っていた俺の乳首を咥えた。

散々弄られ尖りきっていた乳首が急に熱い口内に包まれ吸い上げられ、これまで以上の快感に襲われる。

「ハア、うまい……、乳首まで美味しいのかよ、何だこの身体は……たまんねえな」

「や`あ`ああ……っっ♡♡ や`ら`……そんな`……っっ♡♡ あっ♡あっ♡ あ`ああああ`あ……っっ♡♡♡」

男性は夢中で俺の乳首をしゃぶってきた。こんなカッコいい大人な男性が赤ん坊みたいに乳首をしゃぶって、そんな恥ずかしい事まで言われて余計に身体の熱が上がる。

「ひん`ん`ん`ッッ♡♡♡ や`だっ♡ や`だっ♡ や`だっ♡ や`だっ♡ あ`あ`あ`ああっっ♡♡♡」

ズボンの上からチンコをぐちょぐちょ揺さぶられる。

両手はとっくに解放されたけど抵抗するどころか無意識に男性の肩に縋りついてた。

いやらしいキスと乳首への責めで硬くなり、先走りを垂らしていたチンコがパンツの中で擦られる。

乳首をしゃぶられたままチンコを擦られ二箇所から襲ってくる快感に悲鳴をあげる。

「イけ。ほらいけ。イけイけイけイけイけッ」



「やゝあゝあゝあゝあゝあゝッッッ♡♡♡」

男性は嫌だと訴える俺に構わずそう言ってチンコを揺さぶり、そしてまた乳首をチュルル〜〜〜〜♡♡♡と目一杯しゃぶった。

「あゝ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッ♡♡♡」

我慢できずビュクン♡ビュクン♡とパンツの中で射精してしまう。

「エロい声だな……はぁクソ……たまんねえ……ッッ」

「んゝふううう……っ♡♡♡」

再び口がキスで塞がれ、濡れた乳首は指で捏ねられ、パンツの中で射精したチンコはグチュリ♡♡グチュリ♡♡と濡れた生地ごとたっぷりと揉みしだかれた。

イッた直後にも強い快感を与えられ身体が何度も痙攣する。

声をあげられないまま何度もビクンッ♡ビクンッ♡と痙攣して、俺は頭が真っ白になるくらい男性にイカされ続けてしまった。

「あひゅうううう……♡♡♡」

イカされまくって意識が半分飛ぶ。

俺が動けない隙に男性は悠々と俺のズボンとパンツを脱がした。

「はぐううううっ！？？♡♡♡」

そして俺の足を開かせ、曝け出された無防備な尻の孔へグチュン♡♡と自身の指を挿れてしまう。

「ハハ、何だコレ。ケツの孔なのに奥までぐちょぐちょじゃねえか。何でこんなに濡れてんだ？ ああ？」

「あゝ♡あゝ♡あゝ♡あゝ♡あゝ♡あゝ♡ やゝ、やゝめゝ……ツツツ♡♡♡」

グチョ♡グチョ♡グチョ♡グチョ♡グチョ♡と指を動かしながら男性はますます興奮したように聞いてきた。  
(なゝ、何で……俺の尻の孔……こんな気持ちよく……ツツ？？♡♡♡)

しかしそんな事聞かれても俺だって自分の身体の変化に驚いているのだから答えられる筈なかった。

濡れてるだけではなく男性の指に中を掻き混ぜられ気持ちよさを感じる。

濡れた肉壁を擦られ奥を掻き混ぜられ、その感覚がとても気持ちよくて激しく混乱した。

——実は俺が尻がこんなにも濡れて感じやすくなっているのは、この人の『チンポをぶち込みたい』って願いを受けて俺が召喚されたかららしい——のだけれど、その事実を俺が知るのはもっとずっと先の事になる。

「まるで俺の為に準備されたような孔だな。俺にチンポぶち込まれたくて此処に来たのか？　なあ、そうなんだろう？」

「ちっ、ちが……っ♡♡ そんな……ああッ♡♡ やっ……ちが……っ♡♡ やっ♡♡ めっ……っひうううううううっ♡♡♡」

そんな事知る由もない俺は、無意識に半分正解を当てている男性の言葉を必死に否定した。

チンコを挿れられる為の準備なんてそんなのする訳ないーそう思いつつもついチラッと男性の股間に目をやって、そして全身で震え上がった。

今まで気付かなかったのが不思議なくらい男性のチンコはバッキバキに膨らんでいて、俺の何倍もの大きさがありそうなソレが堂々と反り返っていた。

（ま、ま さか……っ♡♡ あんな化け物みたいなの……俺にいれるつもりなのか……っ??♡♡♡）  
その考えが頭に浮かんだ途端に尻の孔がキュン♡キュン♡中にある指を締めつけた。

「あッ♡♡ あッあッあッあッあッあッうううううッ♡♡♡」

締めつけようとも指はお構いなしにピストンして奥を突き上げる。

二本の長い指でズン♡ズン♡突かれグリ♡グリ♡挟まれ、そんな風に目一杯掻き回されてもとろとろした汁をあふれさせる尻孔はやっぱり気持ちよくてたまらなかつ

た。

「クソ、あんま締めつけんなよ。今すぐぶち込みたくなるだろ」

「あゝ♡♡あゝ♡♡あゝ♡♡あゝ♡♡ あゝ  
あゝひんんんんんッ♡♡♡」

「いくら濡れてるからって今の俺のチンポをぶち込むにはまだ狭いからな。完全にとろとろに解れるまでもうちよい待ってろよ」

男性は俺の尻の中で指をたっぷり前後させ、俺の孔をジッと見つめ荒く呼吸しながらそうやってきた。

興奮に滾った眼差しと荒々しい息遣いで話す様子はまるで俺に対するよりも自分に言い聞かせているようだった。

グチュッ♡♡グチュッ♡♡グチュッ♡♡グチュッ♡♡  
グチョッ♡♡グチョッ♡♡グチョッ♡♡ ズチュン♡♡  
ズチュン♡♡ズチュン♡♡ズチュン♡♡ズチュン♡♡

「あゝ♡♡あゝ♡♡あゝ♡♡あゝ♡♡あゝ♡♡  
あゝ♡♡ あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ♡♡♡」

指は三本にまで増え一層尻の中が淫らな音を響かせた。  
何故尻の孔なのに指に搔き回されて愛液みたいな汁を出しているのか――原因が全くわからない俺はただ自分の尻から出ている音のいやらしさに悶えるしかなかった。